

ルッキズム社会の 生き方

トミヤマ ユキコさん

(ライター／東北芸術工科大学文芸学科准教授)

わたしは山形にある美大の教員をしているのだが、ここ数年、他大学の学生から「ルッキズムをテーマに卒業論文を書いているので話を聞かせてほしい」という連絡が来るようになった。

*

それはわたしが『少女マンガのブサイク女子考』（左右社）という本を書いているから。少女マンガにはブサイクという設定になっているヒロインがあまりいないという世間のイメージを覆すべく、ブサイクヒロインの登場する作品を集めまくり、日本の少女マンガとルッキズムについて分析と考察を試みた本だ。本の元となる連載をスタートさせた2017年当時、世間のルッキズムに対する関心はまだそこまで高くなかったし、他大学からの問い合わせなんてひとつも来なかった。ほんの数年で、ルッキズムへの興味関心がずいぶん高まったのだ。

*

ルッキズムについて取り上げると必ず出てくるのが、「見た目を理由に誰かを差別したり、自分を卑下したりするのはやめよう」というスローガンで、それは確かにその通りなのだが、実際そのように考え行動するのはとても難しい。なぜなら、この社会は視覚を使う場面がとても多いからである。聴覚、嗅覚、触覚が優位な社会だったら人の見た目はここまで問題にされなかったかもしれない。しかし、この視覚優位社会を生きるわたしたちが見た目の問題と無関係でいることはとても難しい。恥ずかしいことだが、見た目で苦しんだ経験があるわたしだって、見た目で人を判断してしまう瞬間があるのだ。

*

だから簡単に「どんな人も美しい」とか「見た目の呪縛から解放されましょう」と言うつもりはない。ルッキズムは、気を抜くと入り込んできてしまう「すきま風」のようなもので、それを防ぐには、心にわき上がる差別や自己否定の感情をちゃんと自覚しつつ、他者や自分自身を傷つけないようにするためのコントロール法を学ぶしかないのだ。

こうしたことは、本来、学校で教えてくれてもよさそうなものだが、今のところその機会はなさそうである。ならばさしあたって少女マンガのブサイクヒロインたちを先生にしてほしい。美人になろうと努力する者、整形手術で変身する者、ブサイクなまま生きていく者……いろいろなヒロインがいて、いろいろな幸せの形がある。彼女たちの物語を読んでいると、「美人はお得でブサイクは損」といった価値観がいかにも陳腐で実態に即していないか痛感する。どんな見た目でも生きていこうと、大事なものは自分の中に軸があるかどうかだ。美醜のジャッジを世間や他人に委ねた者は、たとえ美人でも苦勞する。美人になったら全て解決するわけではないことを少女マンガに教えてもらうだけでも、美醜との向き合い方はだいぶ変わるはずだ。

*

美男美女の物語をたくさん描いてきた少女マンガだからこそ、美男美女ではない人々へのメッセージもちゃんと描けるのだと痛感する。マンガなんて単なる暇つぶし、と思わず、現実と地続きの物語なのだと思って読んでみてほしい。

トミヤマ ユキコさん (ライター／東北芸術工科大学文芸学科准教授)

ライターとして活動するかたわら大学では日本の少女マンガについての研究や編集・ライティング関連の講義を担当。著書に『大学1年生の歩き方』(共著、左右社)、『少女マンガのブサイク女子考』(左右社) などがある。



ちよつと

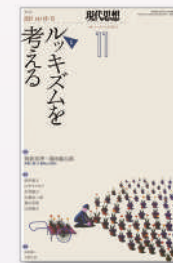
ルッキズム社会を楽に生きるためのブックガイド

すてつぷ 情報ライブラリー所蔵



少女マンガの
ブサイク女子考

トミヤマ ユキコ著
左右社 2020年11月



現代思想 2021年11月号
特集=ルッキズムを考える

西倉 実季 他著
青土社 2021年10月



脂肪と言う名の
服を着て
完全版 (文春文庫)

安野 モヨコ著
文藝春秋/2009年10月